

AJワークショップ

越境するポピュラー文化と＜想像のアジア＞
—一回帰するポピュラー文化とアイデンティティの行方

Cross-Bordering Popular Culture and "Imagined Asia"

Asian Trends Back Home: Reflecting the Collective-Selfhood via Pop Culture

日程：2008年10月12(日)

場所：国士舘大学鶴川校舎 30号館301教室

参加研究者：青柳 寛 (アジア・日本研究センター)

ギャヴィン ホワイトロウ (国際基督教大学)

彭 羅君 (香港中文大学)

羅 貴祥 (香港浸会大学)

「アジアが熱い」といわれて四半世紀を経た今日、「開かれたアジア地域」を目指す貿易の自由化とこれに続くアジア圏内での人と物の流れ、そして文化の越境と交錯は、少なくとも東アジア地域においてはかなりの進展を見せたといえよう。こうした文化社会的な潮流はとりわけアジアのトレンド現象に顕著に現れており、「日流」、「華流」、「韓流」といった流行文化の波を介して日本や中国や韓国の中間層に特徴的な嗜好形態のアジア的広がりに一役を担っている。

本ワークショップは、こうした文脈の中でリジョナル化したトレンドが翻って発信元（発信国）のクリエイターや消費者たちにどのように受け止められ、どのような形で意識改革を促すのか（または促さないのか）といった問題について、日本と中華圏に係わる一連の事例報告を鑑みつつ意見交換を行った。

羅氏は、近年の日本政府による香港マンガ賞とこれに付随する日香協調の主張に着目し、漫画大国日本の政府に認められたことをバネに独自のスタンスを強化し、世界的にアピールしていこうとする香港漫画家側の意図と日本政府側の思惑との見解的なギャップを明らかにした。前者にしてみれば、自分たちの作品が承認されることは荣誉ある事態ではあるが、これが「アジアにおける文化的な統合」よりもむしろ、日本に対抗し得るポピュラーアートの技術的發展とこれに伴う象徴競争がアジア圏内で可能になったことを象徴しているのである。

彭氏は2006年に成立した「フォーカス・ファーストカット」と呼ばれるトランスナショナルなフィルム制作プロジェクトを取材し、これに関わる6人の新進映画監督の作品に一貫したグローバルな生産様式と、そこに表出される中華性を分析する。この生産様式は、ディレクターとプロデューサーの役割的な間柄＝張力とコラボレーションによって特徴づけられる：前者はその殆どが30歳以下の若い初心者で、自分たちの日常的な経験と地方根性に根差したプロットを提供し、映画業界で

の豊富な経験と手腕とコスモポリタンな感覚を兼ね備え、流通ネットワークにも支えられた後者がこれを監修する。こうした工程を通して、中国大陆、台湾、香港、マレーシア、そしてシンガポールの各地方色に彩られた多面的な中華性がリジョナルな文脈において表象されていくのである。青柳研究員は日本のポップカルチャーのリジョナルな広がりとは日本外アジア諸地域における受容形態に対する日本人の反応を吟味し、そこに依然根強いジャパニーズ・エスノセントリズムと日本の大衆の閉鎖性、そして「開かれたアジア地域構想」の限界を見出す。日本人大学生を対象に行ったインタビューからは、近年の華流や韓流のブームを含む国内の流行事情には極めて敏感であるにも関わらず、東アジアに浸透しつつある「日流」とこれが時として誘発する反日感情や文化侵略論争に関しては概ね無頓着であるインフォーマントの様子が窺われた。また、アジアに出向き、そこで日流の現状を目の当たりにすることで初めてアジア・リジョナリズムに覚醒する日本人インフォーマントの遊学嗜好も確認された。

「開かれたアジア」が欧米のトレンドなくして語り尽せない点を踏まえたホワイトロウ氏の発表は、20世紀前半のアメリカに発芽・拡大したコンビニエンス・ストア（所謂コンビニ）のアジア的な広がりを検討し、「都合良さ」というアメリカ流のプラグマティズムに根差した店舗設定とそれを取り巻く社会環境のアジア地域への移入と浸透が、アジア都市部の中間層に特徴づけられる繊細な美意識と行き届いたサービス精神によって「コンビニティー」とでも称すべき新たな社交空間に編成されていくプロセスを明らかにした。欧米文化の受容とそこからの脱却という共通のベクトルに、東アジアの「地域的な開放性」を見出すこともできる。

総じてこのワークショップでは、東アジアにおけるポピュラー文化の越境と交錯によってもたらされたリジョナルな潮流がトレンドの発信源に関わる人々によってどのように評価され、回帰してきた自国の流行現象がどのような形で再利用されるかを考察してみた。今回は参加者の都合上、視座が日本と中華圏の事情に限定されたが、今後は韓国や東南アジア諸地域のケースも踏まえた知の開拓を試みていきたい。

本ワークショップは、アジア・日本研究センターで2005年に企画され、それ以降継続的に実施されてきた「越境するポピュラー文化とく想像のアジア」と題される研究調査プロジェクトの第2弾として開かれたものである。アジアで人気の高まりを見せる各種のトレンドがグローバル化に伴う文化の交錯と嗜好の多様化に果たす役割の解明と今後の展望を、経験論的な視点から行う民族誌の事例研究に基づいて行っていくことを目的に企画されたこのプロジェクトは、初期の段階において越境するアジア・ポップカルチャーの種類と特徴を見極め、その広がり方を検討した。今回のワークショップはこれを一歩先に進める意図で実施した実験的な研究会である。